

Koryu

Ritto International Friendship Association

平成14年度総会開催

2002年4月21日(日)

●挨拶 猪飼 光三郎 会長

新緑の好季節、会員各位にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。さて、私どもの栗東国際交流協会も発足以来3年が経過し、4年目の新しい年度を迎えました。この間、市当局の暖かいご指導、ご支援をいただきながら会員各位のご理解とご協力に支えられ、友好使節団の交流をはじめ、多くの事業を展開し、一応の成果を挙げ得たものと思っております。本年度は、従来の事業の継続発展を期することはもちろんであります。

(ウ) 会員の拡大を図る

(イ) 会員相互の親睦を図る

(ウ) 内なる国際化、中でも在住されます外国籍の方々と共に暮らせる社会を作る

という3点を努力目標として本年度も頑張っております。

どうか倍旧のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。挨拶といたします。

～総会の後、講演と親睦会が行われました。～

●講演「多文化共生時代の到来と私たちの役割

～地域でできる国際ボランティア～

多文化共生センター代表 田村 太郎 氏

1990年代には日本に暮らす外国籍の人々が急増してきた。海外を旅行しているとき、生活をかけて国境を越える人々を見たが、最近では日本でもその外国籍の人々が帰国せず、定住化、永住化するという傾向がみられる。日本国籍取得者は1997年には5000人、2000年にはなんと3万人に増加している。日本に在住する外国籍の人々は現在、中国籍が33万人と最も多く、ブラジル27万人、そしてフィリピン、ペルー、アメリカと続く。こうした傾向は必然的に多くの問題を伴う。まず言葉。フィリピンだけを例にとってみても、島ごとに言語が異なるという。そして子どもの教育。外国籍の子どもたちに「義務教育」を強いることはできないことから不登校が増えているのが現状である。



在日フィリピン人のためにビデオショップを運営していたが、阪神大震災で被災し、外国人被災者も多くいることを知って、現在の多文化共生センターの前身である外国人地震情報センターを設立。最初の1週間で実に200人のボランティアが集まった。7言語での対応が20言語にもなった。言葉の壁、制度の壁、保険の未加入など、地震が起こったからというのではなく、すでに身近にあった問題。

国際交流協会やNGO、NPOの仕事としては、1.姉妹都市などとの国際交流 2.発展途上国への支援などの国際協力、そして3.多文化共生、つまり地域の国際化があげられる。自分たちの住むその地域でできること、それは、同じ権利を持っているという基本的人権の保護、第2言語としての日本語指導や多言語での支援、地域あるいは学校内に異文化を持っている人々が少数ではあるが、存在するという認識。「客」であった人々が「友」となりつつある今、地域社会がどう変わるべきか、地域の社会作りにかかっている。

夢に見た栗東の地で農業研修・日本語学習

栗東市の友好都市、中国湖南省衡陽市から4月15日、農業研修生が5人、栗東市にやって来ました。1年間、JA栗東市で研修します。RIFA日本語教室でも熱心に学習しています。来日1ヶ月後の感想を書いてくださいました。(順不同)



左から 唐さん 黄さん 劉さん 周さん 賀さん

劉 潔さん：7世紀から9世紀にかけて、日本の遣隋使、遣唐使は何度も中国に渡りました。かれらの目的は当時の中国の文化や制度を学ぶことでした。そして、政治、法律、文化、芸術、宗教など、数多くの進んだ文化を日本に持ち帰りました。現在の日本は中国よりとても進んでいます。今、私は自分の目で日本を見ています。ゆっくり日本文化を理解しているところです。他に、見たこと・体験したことなどを中国の新聞で紹介しています。来年、日本の進んだ農業技術を持ち帰ります。衡陽市の農業の発展に貢献したいと思います。そして、栗東市との友好のためにも働きたいと思います。

周 秋さん：栗東市の環境はとてもいいと思います。自然を愛する人々なのでいろいろな方法を考えます(ごみの分別など)。正直な社会だと思います。

唐修国さん：1ヶ月の研修後、育苗センターや、田植え、農薬の空中散布を見ました。日本の農業機械化の程度は高いと思います。この機会を大切に、日本の進んだ農業技術を一生懸命研修し、帰国後は中国の農業技術発展に貢献できるよう頑張ります。

黄益国さん：栗東市役所、JA栗東市は、いろいろと気を配り、熱心に指導してくださっています。私たちは親切な人々に囲まれて安心して生活できます。ここには色々な鳥がいます。自然の保護がすすんでいて、とても美しいところです。まさに「青山緑水」ですね。

賀才明さん：日本の文化、人々、環境、進んだ技術に感心しました。日本は独自の伝統文化に外国の文化をうまく取り入れています。そして日本人は仕事熱心で、親切で、友好的です。

ブラジル発 RIFA (1) 上原久司(ブラジル グアタバラ移住地)

移民地建設計画10年の予定で家族5人、ブラジルのグアタバラに向けてふるさとの信義を後にしたのは1964年、東京オリンピックの年のことでした。10年どころか、あれから実に38年。私たち家族はすっかりブラジルの人となりました。

7300ヘクタールの日本人移住地グアタバラは、ブラジル国サンパウロ市から北へ、282km南緯21°33'、西経47°48'にあります。ブラジルは、赤道直下から南に広がる日本国の23倍の大地であり、春は9月～11月、夏12月～2月、秋3月～5月、冬6月～8月となっています。日本では、6、7月といえば、梅雨の真っ只中ですが、

こちらでは布団や毛布が必要な季節にあります。移住地の建設の中で農業に次いで、32年前に電化、続いて30年前から日本語学校の開校で、子ども達の日本語の教育に村を上げて力を入れてきました。当然ブラジル小学校は義務となっています。村としての文化協会があり、村の運営のため、文化協会会長を主として活動しています。その中で、教育委員会(日語、幼稚園、小学校)、保健衛生等々の委員会があり、長寿会、青年会、婦人会、各県人会、野球部、ゲートボール、演芸部、カラオケ、陶芸、茶の湯、俳句会等文化活動をしています。その他、南米としての文化がたくさんあります。次回よりご紹介いたします。



グアタバラの小学校



タイ・ベトナム・カンボジア等に囲まれたインドシナ半島にある国、ラオス。RIFA会員でもある栗東市安養寺の高森泰彦さんはスタッフの1人としてツアーに参加されました。国際貢献・支援・交流について感じられたこととはどんなものだったのでしょうか。

ラオスで感じたこと

高森 泰彦

「フランスパンの似合う町 ビエンチャン 王家の都 ルアババーン

早朝の托鉢で目を覚まし メコン川の夕陽で1日を終える」

本当はこんな感じでラオスを旅したかったのだが、今回は全く異色の旅の体験となった。青年会議所(JC)が主催する国際研修事業、Global Training School (GTS)。近畿地区JCメンバー144名(栗東JCより22名)参加のGTSツアー、主な内容は以下の3つ。

- ・ラオス・ナーベン村小学校教室と井戸の建設(貢献)
- ・ラオス・ナーベン村牛銀行の開設(支援)
- ・ラオス・ナーベン村でのホームステイ(交流)

日本と比べるとはるかに貧しい国で、トイレは穴があいているだけ、風呂は貯めてある水で水浴び。鶏や牛がその辺を闊歩し、時間がゆっくりと流れている。好きなときにやって来て、好きなだけ食べ、そして勝手に帰っていくラオスの人。子どもたちの瞳はキラキラし、校内暴力や自殺もなく、笑顔が輝いている。忙しい現在の日本人を振り返ると、われわれはどこかに何か大切なものを置き忘れてきたのではないか、見失っているのではないかと、自問自答させられる。壊れた小学校の教室も立て直せないような貧しい国だが、「はたしてどちらが幸せ?」「どちらが豊かなんだろう?」などと。

しかし!!!いったんものを与えてしまうと、それが当たり前のこととなり、「もっと!もっと!」ときりがなくなる。ラオスの子どもたちが喜ぶだろうと持っていたおもちゃは、あっという間に取り合いになり、子どもたちは次の何かをせがんで、われわれの周りから離れなくなった。

今回のツアーはその点が良く考慮されていて、小学校の建設では、資材の費用は日本側の拠出、労働・作業は村人とJCメンバーとが共に汗を流すという協同作業。そして牛銀行。牛を貸してそれを活用することにより、自立した仕事として収入が得られるよう支援するというもの。

でも胸に手を当ててみると、われわれもまた然りである。「魚を与えれば一日、釣りを教えれば一生食べさせられる」という古来の教えがあるが、子どもたちの教育においても、自分自身においてもこのことは肝に銘じておかなければと考えさせられたそんな旅だった。



● 読者コラムにご投稿ください ●

エッセイ、紀行文、詩、短歌や俳句など何でも結構です。採用分には薄謝をさしあげます。

郵便番号・住所・氏名・年齢・職業・TEL/FAXを添えて事務局までお送りください。なお、匿名を希望される方はその旨お書き添えください。